

天皇陛下と水

グローバルウオーター・ジャパン 代表
国連テクニカルアドバイザー



吉村 和就 氏

よしむら かずなり
吉村 和就

天皇陛下ご即位

——五月一日に新しい天皇陛下がご即位されました。天皇陛下は水の研究をされていらっしゃいましたね。

吉村 大変おめでたいことです。天皇陛下は皇太子でいらつしやった時代から水に関する研究をされ、また、様々なフォーラムにてご発信をされていらつしやいました。この度、



聞き手
矢野 弾
(矢野経済研究所特別顧問
潮流社社長)

天皇にご即位されるにあたって、日本国内外における水研究に対する注目度がさらに上がることになるだろうと思います。二十年以上陛下のご講演を国連の場や世界水フォーラムで拝聴してきた水関係者の一人として率直に喜ばしいことだと思っております。

——天皇陛下は、どのくらいの期間、水の研究をされてきたのでしょうか。

吉村 天皇陛下は、学習院大学在学時に水の研究を始められて以来、四十年ほど、水問題への取り組みを続けてこられました。学習院大学在学時には「中世の瀬戸内海がどのようなに交通路と陸路を活用して、文化を作ってきたか」を研究されています。英国オックスフォード大学に二年間留学した際には「十八世紀におけるテムズ川の水運」をテーマに研究

をされました。そこで分かったのは、ヨーロッパは、川一つ一つが大きく雄大なことです。交通手段や輸送路としてライン川やテムズ川を用い、交易をしていました。一方、日本の川は短くて急流なので、交易には適していません。

平成十五年の「第三回世界水フォーラム」(京都)には、名誉総裁としてご臨席なされ、「京都と地方を結ぶ水の道―古代・中世の琵琶湖・淀川水運を中心として―」というテーマで記念講演をされています。このフォーラムには、世界約百八十の国と地域から約二万五千人が参加しました。

海外では天皇陛下が水の研究をされていることは知られています。しかし、逆に日本人はほとんど、そのことを知りません。世界で

は、干ばつ、洪水、津波など、水に関わる問題を多く抱えています。日本は水資源が豊富で、「瑞穂国」と言われるくらい、水とともに生きてきたのです。その日本の天皇陛下が水研究に取り組んでいるということは、世界において日本の存在感を増していくことにつながると思います。

——天皇陛下がそういった国際的な会合にて水のお話をされてきたということは、ほとんど知られていませんね。

吉村 そこが問題です。例えば二〇一八年九月東京で開催されたIWA（国際水協会）総会にて、天皇陛下は、東日本震災において津波などから復興する日本人の姿について、講演で話されています。その講演内容は、当日中にBBCやNYタイムズなどに掲載され

ともずっと闘ってきました。弥生時代の環濠集落、平城京が長く存続しなかった理由、江戸時代の利根川の東遷、歴史的な出来事の背景には水があります。

——人類は、水を抜きにしては歴史を語れませんね。天皇陛下は水に関してどういった発信をされているのでしょうか。

吉村 天皇陛下のご講演が他の方と違うのは、その着眼点です。天皇陛下は水を背景にして歴史を紐解きます。日本人がどうやって縄文・弥生時代から水と闘い、利用してきたのか、といった日本の水に関する歴史や知恵を最初に紹介します。そして世界という目線で、トルコのインスタンブール、スペインのドン・キホーテの話などに触れ、最後に世界はどうあるべきか、という必ず三段階を踏まえ

ましたが、日本の五大紙では、講演内容には触れずに、ご臨席された事実だけを報道した形でした。天皇陛下が水のご研究をされていることが日本国民にあまり知られていないのは、残念なことです。マスコミの情報発信不足も一つの要因ではないかと思っています。

日本人と水

吉村 日本という世界最長の国家の歴史を支えられてこられた天皇陛下が、水という欠かせないテーマを研究されている。こんなに貴重なことはありません。人類が生きていくためには水は必須です。日本においても、世界においても、人類の歴史の多くは水に関連した闘いでした。あるときは人間同士の争いの火種になり、干ばつや氾濫といった自然災害

をしています。

——見事ですな。

吉村 とてもわかりやすい講演です。使用する写真や資料は基本的に、ご自身が現地で撮影された写真やご自分で手を入れたデータが使われています。世界水フォーラムに参加した三〇四万人に感動を与えられる、天皇陛下の素晴らしい一面です。

——オックスフォード大学への留学は水の研究において重要なご経験だったのですね。

吉村 例えば、テムズ川の研究の際にも、資料の在り処を教えてもらったら、ご自身で一か月近く図書館に通って、ノートへ書き写されたそうです。データや事実をご自身で追究し、整理する能力を磨かれていらっしゃった。



自ら情報を集めて分析し、不十分なら専門家の話を聞く、それが世界平和にどうつながるかという視点をお持ちなのが素晴らしいです。天皇陛下は、日本のことを考えながら、アジアや世界にどう貢献できるかを常に考えられています。

水問題の理想と現実

——水は、生活と地球に関連が深く、とてもいいテーマを選ばれています。吉村先生は、水と経済の関係をどう捉えられていますか。

吉村 例えば、途上国で井戸を採掘する費用、アジアでの水道管漏水率四〇〜五〇%の改善費用、水不足地域における海水から淡水化への転換費用など、水問題を解決しようと思う

のが、世界の常識です。

——国連には、世界百九十三カ国が所属しています。国連の活動は現在、いかがでしょうか。

吉村 資金不足のために国連職員全体が縮小しています。国連の部署には主に二種類あり

ます。方針を決める部署と、実践部隊の部署です。私は、方針を決める部署である、国連本部の経済社会局にいました。一方の実践部隊は、ユネスコやユニセフ、WHOなどです。実践部隊の権限が強く

と、必ずお金が必要になります。ですから、水問題について様々な議論をすることは大事ですが、物事を判断するためには、理想と現実の両面から考え、実行にあたってはその裏づけとなる予算が必要です。人を動かすためには固有名詞、数字、それをバックアップするデータが必要です。ただ、私が国連本部で従事していた経験から申し上げますと、日本人は比較的、統計が苦手だと感じています。国連では、根拠となるデータの裏づけがなければ誰も話を聞いてくれません。言葉も文化も全く違うため、共通して信用できるのは数字なのです。統計の数字を前提に物事を考えていかなければなりません。何をやるにも数字を基にして、過去を振り返り、未来に向かって今後どうするかを考えなければならぬ

なると、方針を決めることが困難になります。日本で言えば、省庁が強すぎて、内閣がコントロールできないというような状態です。

——資金不足は大変な問題ではないですか。

吉村 アメリカが非協力的で、国連に対する支払いを滞納しています。支払期日のギリギリに支払うという状態です。「ボーディング」という投票権利がなくなってしまうからです。逆にアメリカの意見を通さないとすぐに支払いが滞ります。日本は、かつては世界で二番目に国連分担金を支払っていました。今は中国が二位、日本は世界で三番目に多く支払っています。いずれにせよ、会合の場で議論しても、実践する資金が国連にないという状態です。

世界の水の未来

——未来と水についてはどう捉えられていますか。

吉村 世界的に見れば、地球温暖化によって水災害が増えています。水災害とは、洪水、干ばつ、津波などを含みます。二〇〇六年三月メキシコの「第四回世界水フォーラム」にて天皇陛下は、「江戸と水運」として日本人が江戸時代にどのように水を制したのかを話されました。

徳川家康は、暴れ川だった利根川の流れを変えました。当

時は、江戸や中川へと流れていましたが、銚子の方へと東遷しました。同時に、新田開発や江戸の水路開発に着手します。当時の日本の家屋は、木造建築で火災が起こればあっという間に火の手が広がります。そこで街をブロックで区切り、両側に水路を設置して、飯に火事になってもブロック内で被害を抑えられるようにしました。さらに、東京湾、利根川、荒川を使って、物資の輸送も行いました。これらが日本の歴史だとおっしゃっています。天皇陛下は今年の四月に「水運史から世界の水へ」(NHK出版)を上梓されました。これまでの水関連の活動をまとめられています。とてもまとまっておりわかりやすいので、日本国民の必読書として推薦したいです。

——天皇陛下は常に水は日本を支え、アジアや世界を支えていると主張されています。今後、取り上げたいテーマは何でしょう。

吉村 テーマとしては「水との共生」でしょう。人類は古来、水と親しみ社会に役立ててきました。最近では地球温暖化により水災害が非常に増えています。災害とどのように向き合うかといった視点が必要です。

国連では、未だに安全な水にアクセスできない人口が世界で約八億人いることを問題に挙げています。世界の貧困の原因の多くは、水です。水さえあれば、農業ができ、食物を手に入れます。安全な水が確保できれば、衛生環境も良くなり、伝染病で亡くなる人が減ります。そのためには安全な水源を確保するか、水を浄化して使用するかです。前者は

地理的条件によりますが、後者であれば世界中の人が可能です。日本の技術で貢献できる部分もあります。

新しい天皇陛下が即位された令和の時代に、世界の水問題解決のきっかけを日本から発信していければと思います。

——貴重なお話をありがとうございます。

■よしむら・かずなり

昭和四十七年 荏原インフィル株式会社 入社

平成六年 株式会社荏原製作所本社 経営企画

部長

平成十年 国連ニューヨーク本部・経済社会

局・環境審議官に就任

平成十七年 グローバルウォーター・ジャパン設立

日本水フォーラム理事